

第七の孤独

——ニーチェにおける「真理への意志」の由来を求めて¹⁾——

木 本 伸

1. 真理への意志

ヨーロッパの思想家のテキストを読むとき、いつも訝しく思うことがある。それは彼らの真理に対する強烈な関心である。「知を愛する」という „Philosophie“ の語源に従うならば、確かに哲学者とは「知を愛する人」に他ならない。それでは、この知を愛する力は彼らに与えられた天与の資質なのだろうか。それとも知を愛する力にも、それを可能にした何らかの条件があったのだろうか。

この真理への関心について、深く考察した作家の一人がニーチェである。よく知られているように、ニーチェはキリスト教とヨーロッパ形而上学に対する仮借ない批判者だった。20世紀後半に流行した形而上学批判は、19世紀末のニーチェから出発したとも言えるだろう。ところが彼自身を伝統的真理に対する批判へと誘ったのは、やはり真理への関心だった。²⁾ 例えば後期の著作『道徳の系譜』の序文で、彼は自分の思想的営為を導いたのは「認識の根本意志」(5, 248)であったと述べている。実際にニーチェの思想がどこまで認識関心によって貫かれていたのかは、全著作を通して確認されるべきことだが、その余裕のないここでは、『曙光』(429番)に収められた次のテキストを見ておきたい。

認識は私たちの中で、どんな犠牲も怖れない、ついには自分自身の消滅より他には何者をも怖れない情熱に変わった。(…)そうだ、私たちは野蛮を憎む。——私た

*本論で使用するテキストは次の通り。Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke. Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden. Hg.v. Giorgio Colli u. Mazzino Montinari. München (dtv) 1988. 以下、同書から引用する場合は、本文中に著作名(アフォリズム番号)および巻数と頁数を示している。なお遺稿の場合には断片番号を添えた。

1) 本論は日本独文学会春季研究発表会(1998年6月6日、中央大学)での発表原稿を加筆訂正したものである。

2) この真理へと誘惑される真理の批判者という矛盾した関係は、『善悪の彼岸』の冒頭に置かれた「私たちをなおも多くの冒険へと誘うだろう真理への意志」(5, 15)という言葉に要約されている。ニーチェに帰せられる複数の真理の発見という功績も、より正確な真理内容の獲得を意味する限り、やはり真理への意志の産物だった。以上の意味で本論は、ニーチェの思想を真理との両義的關係によって規定する試みである。

ちはみな、認識の後退よりも人類の没落を欲するのだ。

(3, 264f.)

ここでニーチェは、認識こそ唯一の価値であると主張している。しかし絶対的真理の批判者であった彼は、真理への意志に導かれる一方で、これをも批判的検討の対象と看做していた。つまりニーチェの認識への意志は、認識の自己超越へと向っていくのである。それでは彼は、認識の背後に何を発見していくのだろうか。

2. 認識の悪魔

自己の思想の核心に「認識の根本意志」を認めたニーチェは、『道徳の系譜』の同じテキストで、この意志が初めて発現した場所として13歳の時の「私の初めての哲学的習作」(5, 249)に言及している。この少年ニーチェのテキスト自体は発見されていないが、これを追想する後年の三つの断片によれば、そこには次のように記されていたという。

子供の時、光の中に神を見た。——悪魔の成立についての初めての哲学的記録(神は自己自身を思惟する、これを神は自己の対立者のイメージによってのみ可能にする。)³⁾

(8, 505, 28 [7])

この断片によれば、神は自己認識のために悪魔という自己の対立者を必要とした。つまり認識行為には何らかの視点が不可欠である。ここから、すべての認識は特定の視点からなされる限定的なものであり、あらゆる立場を離れた絶対的認識などは有り得ない、という結論が導かれる。ここには早くも神やイデアといった絶対的真理を拒否することで、多様な認識世界を拓いていく後年のニーチェが顔を覗かせている。その際に認識者ニーチェの足場は、明らかに神よりも、神にとっての認識の契機を体現する悪魔の方に置かれていた。少年時代の思索をめぐる第三の断片で、悪魔が神の子と同一の年齢と由来を有しつつも、「より明瞭な起源」(einen klareren Ursprung) (11, 616, 38 [19]) を持つとされているのは、これを示唆しているだろう。

この少年ニーチェの発想は、そのままの形式で後期の認識論へと直結していく。あらゆる認識が立場によって限定されるのならば、対象から距離を取ることでその全体像を捉えようとするのは当然の発想である。そのためニーチェは違い視点を求めていくので

3) ここに引用したのは三つの断片の中の第一のものである。オリジナルのテキストが失われている以上、これらが本当に少年ニーチェの思索に由来するのかは確認できない。しかし三葉の断片が1778年、1884年、1885年という互いに離れた時期に、しかも他者を意識する必要のない雑記帳に記されていることは、彼の言明の信頼性を高めるだろう。これほど執拗に彼が少年時代の思索を想起したのは、そこに記された認識形式が後年の認識論の原形をなしていたからである。この問題については、次の論文を参照のこと。拙著：中期ニーチェ研究「自由精神」による「確信」からの解放(学位論文[広島大学文学研究科])1998。第2章「認識への意志から生まれた矛盾の哲学」46-74頁。

ある。⁴⁾『善悪の彼岸』(129 番)に収められた次の文章は、こうした彼の思想的展開を十分に跡付けている。

悪魔は神に対して最も広い視野を持つ。それゆえに悪魔は、神からはるか遠くに離れている。認識の最も古い友である、あの悪魔は。(5, 95)

悪魔にとって神の世界は、自分の生まれ故郷である。その悪魔が故郷を去るのは、ただ「広い視野」を獲得するために他ならない。ここから如何にニーチェが彼の強烈な認識関心を、悪魔のメタファー⁵⁾に仮託しているかは明らかだろう。

だが現実の認識者は、悪魔ほどに認識に徹し得るわけではない。現実の人間は愛や憎しみの直中を生きている。ニーチェはこうした現実を見落とすことはできなかった。⁶⁾だが同時に、認識は愛や憎しみによって歪められてはならない。認識者は人間的な情念を犠牲にしつつも、悪魔への道を歩むのである。彼が何度でも「真理に仕えるということは、最も苛酷な務めである」(『アンチキリスト』50 番, 6, 230)と述べたのは、自己への叱咤でもあったろう。こうして自己を苛みつつ認識の道を歩むとき、人間は「孤独」という感情に襲われるのである。

ある日、漂泊者は後ろ手に戸を閉め、たたずみ、泣いた。それから彼はこう言った。〈真なるもの、実在するもの、仮象でないもの、確実なものへと向かうこの衝動と執着。いかにこうしたものが私を憤らせることか。なぜ陰鬱で情熱にあふれるこの勢子は、私の跡を追うのか。私は休息を求めている。しかしそれは許されないのだ。(…)> (『楽しい知識』309 番, 3, 545f.)

この認識者の苦悩を綴ったテキストは「第七の孤独から」と題されている。このようにニーチェは認識者の孤独を「第七の孤独」あるいは「七つの孤独」と呼んだ。この「七」という唐突な数字に、彼は私たちが知る孤独とは別の彼独自の意味を込めていたようだ。それでは認識の悪魔が呼び起こす「孤独」とは、一体何なのだろうか。

4) 認識には対象との距離が不可欠であることを、ニーチェは様々な比喩で説いている。『人間的な、あまりに人間的な』616 番および『楽しい知識』380 番の文章を参照せよ。

5) ニーチェは「認識の悪魔」の意味で、„Teufel“と „Dämon“を併用している。一般に前者では、そのキリスト教的起源が、後者では破壊性が強調される傾向がある。

6) 「もしも学問が認識の快楽に、認識された事物の効用に結わえられていないとしたら、私たちにとって学問など何の意味があるだろうか。」(『様々な意見と箴言』98 番, 2, 417f.) 中期のアフォリズム集では、これと類似した文章は少なくない。

3. 母胎としてのキリスト教

ニーチェは一生を通じてキリスト教の批判者であり続けた。このことは逆説的にも彼とキリスト教との密接な関係を示している。敬虔な牧師館の子として生まれ、その最後の自伝的著作(『この人を見よ』)を「それでは私を理解したのだろうか——ディオニュソス対十字架に架けられし者」(6, 374)と結んだ作家の生涯は、いずれにせよキリスト教なしには有り得なかっただろう。⁷⁾ それだけに彼の真理感覚は、このヨーロッパの世界宗教に対して最も鋭く働いたのである。彼は直截に「あらゆる宗教は、真理を語るという義務を驚くほど軽んずる」(『曙光』91番, 3, 85)と指摘する。それではニーチェ自身は、この「真理への義務」をどこで獲得したのだろうか。

それが義務として感覚される限り、真理を語るということも一つの道徳性に違いない。この真理と結びつく道徳性を彼は「正義」あるいは「誠実」と呼んだ。例えば初期の著作『生に対する歴史の利害』では、正義の人は「人間という種の最も畏敬すべき範例」(1, 286)と称えられている。それは正義の人が「冷酷な認識の悪魔」(ein kalter Dämon der Erkenntnis)を目指して孤独に耐えているからだ。ただし人間である彼は「正しくあろうという純粋な意志」(1, 287)に導かれつつも、今なお「認識の悪魔」であることはできない。そのため両者の関係は、正確に接続法二式で結ばれている。つまり正義とは人間を「認識の悪魔」へと駆り立てていく道徳性なのである。⁸⁾

こうした正義や誠実の概念は、ニーチェによればキリスト教から見事に欠落しているという。そのため彼は、「いかにキリスト教が誠実と正義に対する感覚を育てることに乏しいか」(『曙光』84番, 3, 79)を倦むことなく語る。しかしキリスト教道徳を攻撃する彼の口吻は、まさに彼自身の道徳性の由来を暴露していくのである。

ソクラテスの徳の中にも、キリスト教の徳の中にも誠実は現われていないことに気をつけよ。誠実は最も若い徳の一つである。それは、まだあまり成熟していない、よく取り違えられ、誤解され、自分でもまだほとんど自覚に至らない——ある生成中の、私たちの感覚次第によって育成することも阻害することもできる徳なのである。
(『曙光』456番, 3, 275)

7) 例えば神学の父祖パウロに対する執拗な非難も、ニーチェの思想をキリスト教世界の内部の出来事と看做せる根拠の一つである。彼にとってパウロとは、悪意に満ちた意味で最高の天才、そのため最も無視し得ない存在であった。Vgl. Salaquarda, Jörg: Dionysos gegen den Gekreuzigten. Nietzsches Verständnis des Apostels Pauls. In: Wege der Forschung. Hg.v. demselben. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1980, S. 288-322.

8) ニーチェの思想が「真理への意志」によって貫かれた限りにおいて、その核心に「誠実」を認める次の議論は正当性を持つだろう。その意味で道徳の問題は、彼にとって最大の課題だったのである。Vgl. Nancy, Jean-Luc: „Unsre Redlichkeit!“ (Über Wahrheit im moralischen Sinn bei Nietzsche) In: Nietzsche aus Frankreich. Hg.v. W. Hamacher. Frankfurt a.M. / Berlin (Ullstein) 1986. S. 169-192.

この文章には綻びがある。まず筆者は、ソクラテスやキリスト教に代表される過去の諸思想には、誠実が「現われていない」と主張する。しかし同時に彼は、誠実は「最も若い徳の一つ」として、不十分ながら今や実際に存在していると言う。ならば、かつてどこにもなかったものが今や現に生成しているという二つの言説の矛盾は、どう繕えばよいのだろうか。問題の鍵は、否定的に使われている動詞 „vorkommen“ (現れる) にある。この動詞の本来の意味は、潜在的に隠れていたものが「前へ出て来る」(nach vorn kommen) あるいは「現象する」(zum Vorschein kommen) ということだ。つまり正義や誠実はソクラテスやキリスト教においてこそ、将来の道德性として、ゆっくりと準備されていたのである。

一体何がキリスト教の神に打ち克ったのかは明らかだ。キリスト教の道德性そのものの、いっそう厳格に理解された誠実の概念、学問的良心や知的な潔白さへと翻訳され、洗練された、キリスト教的良心の贖罪師のような繊細さ、これである。(『楽しい知識』357 番, 3, 600)

ニーチェは人生を「認識者の一個の手段」(『楽しい知識』324 番, 3, 552) と看做した。だが認識が最高の目的で有り得るためには、認識のみを唯一の価値とする特殊な道德性が前提されねばならない。その意味で認識への意志とは、一つの道德的態度である。⁹⁾ こうしたエトスを培ったのは、まさに何世代にも渡る宗教的伝統であった。ところが、この人間を真理へと誘う感覚は、今や自分を生んだ信仰そのものに刃向かうのである。ニーチェという認識者が生まれ故郷であるキリスト教世界と対峙したとき、「第七の孤独」という独自の感情に襲われた理由の一つは、ここにあったようだ。それではキリスト教のモラルによって研ぎ澄まされた認識への意志は、キリスト教の何を暴いていくのだろうか。

4. 認識と創造の虚構性

ここでもう一度、少年ニーチェの「哲学的習作」に戻ろう。あの認識の原理をめぐる考察は、神の一人芝居という形式で表現されていた。これは何を意味していたのだろうか。キリスト教世界において、神とは世界の造物主に他ならない。その神を原初の認識者と看做したとき、少年ニーチェは認識と創造という二つの行為の内密な関係を直観していたに違いない。そのとき認識の自己遡及は、そのまま創造の秘密を暴露していくのである。

少年ニーチェによれば、神の自己省察は悪魔とともに始められた。しかし認識視点と

9) ニーチェは「真理への意志」という道德的感情の持つ両義性を自覚していた。「〈認識それ自体のための認識〉——これは道德が仕掛ける最後の罠である。これによって人間は、もう一度まるきり道德に絡め取られるのである。」(『善悪の彼岸』64 番, 5, 85)

しての悪魔は、実在である必要はない。それは神のイメージ (Vorstellung) であれば十分だ。ここから、ある重大な疑惑が生じてくる。それは単なるイメージを通して創られた認識世界というものは、実体のない虚構に過ぎないのではないか、という疑念である。このとき認識世界は根源的に否定されていく。しかも、それは実在的な創造世界の否定をも意味している。なぜなら実在は認識によって初めてそれと確認されるのであり、その意味で認識の最期は実在世界の終息地点に他ならないからだ。少年ニーチェの第三の断片で、神の「思惟」(denken) が「創造」(schaffen) へと言い直されていることは (11, 616, 38 [19])、この可能性を強く示唆している。この認識と実在の共通点を抉り出す発想は、次の『人間的な、あまりに人間的な』(9 番) の文章からも確認することができるだろう。

私たちは、すべての事物を人間の頭を通して眺めるのであり、この頭を切り落とすことはできない。その一方で、仮にこの頭を切り落としたなら、それでもまだこの世界の何かが存在しているのだろうか、という問題は残るのである。(2, 29)

これに対して「頭を切り落とした後にも、切り落とす前に認識した事物は存在する」といった反論は困難である。なぜなら認識と創造が一時に成立する世界では、すべての「なぜ」は、原初の認識および創造へと収斂するしかないからだ。そして、この創造世界の外では、もはや問自体が存在しないのである。この認識と創造の秘められた歴史をニーチェは初期の遺稿『真理のパトスについて』で、次のように描き出している。

無数の太陽系をなしてまたたく振り撒かれた宇宙のある辺鄙な一隅に、あるとき一つの天体が存在した。その天体上で、伶俐な動物たちが認識というものを発明した。それこそ世界史の最も誇り高く欺瞞に満ちた一瞬だった。しかしそれも一瞬のことである。ほんのしばらく自然が呼吸したかと思うと、その天体は凍結し、かの伶俐な動物たちは死滅しなければならなかったのである。(1, 759f.)

この寓話は「ある感情のない悪魔」(ein gefühlloser Dämon) によって語られている。それはこの物語の意味するものが、認識の全歴史であるからだ。しかし認識の歴史は、そのすべてが虚構である。そのため作者は「伶俐な動物が認識を発明した」という個所で、„erfinden“ という動詞を使用している。つまり認識は捏造されたのである。この認識の暴露は、そのまま認識が生み出す「世界史」¹⁰⁾ の虚構性を提示していく。別の遺稿(『道徳外の意味における真理と虚偽』1,875) では、同一テキストの「世界史」の部

10) ここで「世界史」(Weltgeschichte) という言葉が登場することは、初期テキストで散見されるヘーゲル批判の一環とも看做される。ただし本論では、これを「世界史」概念の実体性に対する批判という局面に限定して考えたい。

分に引用符が付されている。それは、この世界の仮定的性格を示唆するものに他ならない。だがいつの日か、認識を生み出した「怜悯な動物たち」も死滅する時が来るだろう。そのとき世界は必然的に消滅するのである。ここに記されたのは、キリスト教の創造神話に対するニーチェ独自の読み替えだった。輝かしい創造の物語の背後に、彼は認識の黙示録を読み取ったのである。

5. 第七の孤独

創世記によれば神は世界を七日間で創造した。仮に認識と創造が同じ瞬間の出来事であるならば、認識の悪魔が生まれたのは、この七日間であったはずだ。¹¹⁾ 認識者の孤独が「七つの孤独」とも呼ばれるのは、そのためだろう。だが「ミネルバの梟」の寓話が教えるように、実際に認識が生まれるのは過去を振り返るときである。ならば神が「自己自身を思惟する」のは、神が行為した初めの六日間よりも、むしろ創造の七日目であったはずだ。見方を変えれば、あらゆる認識の瞬間は創造の七日目に相当する。その意味でニーチェは、「悪魔とは七日目ごとの神の気晴らしにすぎない」(『この人を見よ』6, 351)と言うのである。「第七の孤独」という奇妙な表現の根拠は、ここにあった。

創造の七日目に生まれた認識の悪魔は、創造世界の他者であった。この悪魔が孤独をもたらすのは、それが自己の生きる天地を否定するからだ。つまり「第七の孤独」は、神の世界における神の殺害に由来するものと言えるだろう。ならば神なき永遠回帰の世界を語るニーチェの言葉は、そのまま「第七の孤独」の表現となっているはずだ。「最大の重し」と題された『楽しい知識』341番のテキストは、初めて永遠回帰の思想が暗示された個所として知られている。ここでは全文を紹介する余裕はないが、新たな認識の戦慄であふれるこのテキストが「どうだろう、ある日あるいはある夜、お前の最も淋しい孤独へと悪魔が忍び入り、こう言ったとしたら」(下線引用者 3,570)という言葉で始まることを確認すれば、なかば必要は満たされるだろう。これに呼応して「永遠回帰」をテーマとする『ツァラトゥストラ』第3部は、遺稿の中で正確に「七つの孤独の書物」(10, 498, 16 [7])と呼ばれている。こうして神という母胎から生まれたニーチェの真理への意志は、彼独自の孤独へと至りついたのである。

6. 美への誘惑

真理への意志に誘われた認識者は、孤独という「畏るべき女神」(『人間的な、あまりに人間的な』序文 3, 2, 17)に遭遇した。だが一方で、この女神は絶対者の虚偽を暴露した彼の伴侶でもある。そのため彼は、この孤独を高らかに称えていくのである。

11) 「創造」には「想像力」(その意味での「認識」)が不可欠である。これを指摘したのは次の著者である。シオラン(金井裕訳): 悪しき造物主(法政大学出版局)1984, 4頁。

敬虔な者には、まだ孤独は存在しない。この孤独を初めて発明したのは私たち、私
たち神なき者なのだ。¹²⁾ (『楽しい知識』367番, 3, 616)

さらには孤独は「おお孤独よ、汝、私の故郷である孤独よ。お前の声は、なんと幸福
にやさしく私に語りかけてくることか」(『ツァラトゥストラはこう言った』第3部,
4,232)とさえ謳われていく。まるで勝利した認識の悪魔が、創造世界の廃虚を恍惚と
して歩み行くかのである。

この認識者の幸福は、何によるのだろうか。ここで再び問われるのは、ニーチェにお
ける真理への意志の由来である。すでに考えたように、人間を認識へと駆り立てるのは
正義や誠実などの道徳性であった。しかしこれらの道徳性には、つねに „sollen“ の響
きがある。確かに「真理を語る義務」なしには、牧師の息子ニーチェが神を殺すほどの
認識者へと成長することはなかっただろう。だが神より与えられた道徳に従うだけで
は、神の背後を突くほどの力は得られない。また実際にニーチェのテキストには、不思
議な怪やかさがある。それは認識の義務ではなく、欲びが、そこにはあるからだ。彼は
宣言する、「最も醜悪な現実も、その認識は美しい」(『曙光』550番, 3, 320)と。それ
では、この認識の美はどこから生じるのだろうか。次の文章は、まさにこの認識者の秘
密を暴露している。

私たちの学問への信仰がやすらうのも、相変わらず形而上学的信仰であり——私た
ち現代の認識者、私たち神なき者にして反形而上学者も、まだ私たちの火を数千年
の古い信仰が灯した松明から、神は真理であり真理は神々しいという(...)あのキ
リスト教の信仰が灯した松明から拾ってくるのだ。

(『楽しい知識』344番, 3, 577)

認識の美の起源は「神は真理であり真理は神々しい」という信仰に存していた。これ

12) 原文は次の通り。(denn) für einen Frommen giebt es noch keine Einsamkeit, — diese Erfindung haben erst wir gemacht, wir Gottlosen. この箇所は、現在の二つの邦訳では次のように訳されている。1. こうした区別の案出は、われわれが、背信の徒であるわれわれがはじめてやったことなのだ。(『悦ばしき知識』信太正三訳、ちくま学芸文庫) 2. こうした区別の発明はわれわれ——神を持たない者によってはじめて可能となったのだ。(『華やぐ智慧』氷上英廣訳、白水社) この本文では、芸術の分類が論じられている。ニーチェによれば、芸術作品は神や他者を意識したものと、それ以外の孤独の中で造形されたものとに分類されるという。そこで二人の訳者は、この芸術の分類方法を „Erfindung“ の内容としている。それには、直前の「孤独」を「発明」の内容とするのは不自然とする常識的な判断も与ったのだろう。しかし、すでに述べた通り、ニーチェによれば「認識」は「怜悯な動物たちの発明」であり、それと同じ意味で「孤独」も彼らの「発明」である。この文章でも「敬虔な者には、まだ孤独は存在しない」という箇所、こうした視点の連続性が認められる。以上の理由から、当該箇所については既訳に異論を呈しておきたい。

は創造の七日目を聖なる一日と看做した創世記の記述とも一致している。¹³⁾ しかし神なき者たちは、この信仰に止まることはできない。そこで筆者は、この文章を「しかしどうだろう(…)もしも神自身が、私たちの極めて長い嘘であったということがわかるとしたら」という問い掛けで結ぶのである。この間に答はない。なぜなら、これに「然り」と答えることで神を否認するとき、義務と歓喜の源を失った真理への意志は消失するしかないからだ。つまり信仰の否定は、認識の存在理由の否定を意味している。こうした意味で、認識への意志に導かれたニーチェの思想には、その完結の瞬間に崩壊するという決定的な自己否定の契機が秘められていた。彼が最後の遺作を『アンチキリスト』と名付けていたことは、この意味で象徴的である。¹⁴⁾ 神との最後の戦いを演じる「アンチキリスト」は、仮に勝利しても、それによって自己の消滅を避けることはできないのだ。まさにニーチェの思想とは、神の懐に生まれ神の否定に終る一つの黙示録だったのである。

Die siebente Einsamkeit

— Vom Ursprung des „Willens zur Wahrheit“ bei Nietzsche —

Shin KIMOTO

Das aus dem Griechischen stammende Wort „Philosophie“ bedeutet: „Liebe zur Wahrheit“. Und wirklich gibt es in der Geschichte der Philosophie unabhängig von der Verschiedenheit der jeweiligen Lehren genug Beispiele dafür, daß die Denker von einem „Willen zur Wahrheit“ zur Philosophie hingeführt wurden. Die Frömmigkeit gegenüber der Wahrheit bestimmte Nietzsches Haltung jedoch nicht. Er versuchte vielmehr, die Ursache dieses geheimnisvollen Bedürfnisses nach Wahrheit zu ergründen. Was ihn dabei bestimmt hat, war aber wiederum dieselbe „Liebe zur Wahrheit“. Infolgedessen entwickelte er ein ambivalentes Verhältnis zur Wahrheit, das seine gesamte Denkweise grundlegend bestimmt. In der Vorrede zur „Genealogie der Moral“ bestimmt er im Gleichnis vom Baum den „Grundwillen der Erkenntnis“ (5, 248) als den Samen, aus dem seine Philosophie gewachsen ist.

Im selben Text erwähnt er eine „Schreibübung“, die er als Dreizehnjähriger gemacht hat und in der zum ersten Male in seinem Leben dieser „Grundwille“

13) 関根正雄訳:『創世記』(岩波文庫)1990, 11頁参照。

14) 著者は『アンチキリスト』の序文の中で、この書の読者たる条件として「七つの孤独からの一つの体験」(6, 167)を挙げている。

zum Vorschein kam. Da sollte über die Entstehung des Teufels gehandelt werden: „Gott denkt sich selbst, dies kann er nur durch Vorstellung seines Gegensatzes“ (8, 505). Man kann hier die Erkenntnisweise Nietzsches feststellen: Das Erkennen ist genauso abhängig von einem Perspektivwechsel wie die Selbstbetrachtung Gottes abhängig ist von seinem Gegenteil. Es gibt also keine über alles erhabene „Wahrheit“, wie sie das Christentum voraussetzt. Man muß daher eine distanzierte Perspektive auf die Gegenstände haben, um sie genauer zu sehen, was ein Text späterer Zeit bestätigt: „Der Teufel hat die weitesten Perspektiven für Gott, deshalb hält er sich von ihm fern“ (5, 95). Der Teufel, der als „der älteste Freund der Erkenntnis“ (ebd.) jenem „Grundwillen“ folgt, geht von seinem Gegenspieler Gott fort. Kann der Mensch aber so kaltblütig wie der Teufel der Erkenntnis den Rücken kehren? Er muß dann an einer Einsamkeit, die Nietzsche die „siebente“ zu nennen pflegte, leiden.

Anhand der „siebenten Einsamkeit“ läßt sich allmählich die Herkunft des „Willens zur Wahrheit“ bestimmen, wobei im gleichen Maß das ambivalente Verhältnis Nietzsches zum Christentum deutlich wird. Er hebt moralische Werte wie „Gerechtigkeit“ oder „Redlichkeit“, die einem die Pflicht zur Wahrheit bewußt machen, gern hervor. Er kritisiert dabei, daß sie im Christentum entscheidend fehlen. Es wird je doch letzten Endes in der Vertiefung der Thematik zu seiner Qual entdeckt, daß, „was eigentlich über den christlichen Gott gesiegt hat“, „die christliche Moralität“ wie z.B. die „Redlichkeit“ selber war (3, 600). Der Teufel der Erkenntnis ist nämlich ohne seinen Todfeind Gott unvorstellbar.

Jener „Schreibübung“ zufolge beginnt das erste Erkennen mit der Selbstbetrachtung Gottes, was andeutet, daß Denken und Schöpfen bei ihm ursprünglich miteinander verbunden sind. Das beweist, daß in einer Variante des Textes das „Denken“ Gottes zum „Schaffen“ verbessert wird (11, 616). Wenn Gott sich selbst denkt, ist das daher nur nach den Schöpfungstagen, nämlich an seinem Ruhetag, dem siebten Tag also, möglich: „Der Teufel ist bloss der Müsiggang Gottes an jedem siebenten Tage“ (6, 351). Die Schöpfung „durch Vorstellung seines Gegensatzes“ ist jedoch mehr oder minder von provisorischem Charakter. Der Teufel der Erkenntnis ruft deshalb die „siebente Einsamkeit“ hervor, weil er seinen Ursprung grundlegend verneint. Wenn die Unhaltbarkeit der Schöpfung doch schließlich durchschaut würde, so müßte auch seine Gedankenwelt damit zugleich zusammenbrechen. Der antichristliche Wille Nietzsches führt im gesagten Sinne unvermeidlich zur apokalyptischen Selbstvernichtung hin.